コロナ禍のメキシコに学ぶ

第三回メキシコ研修報告書

(2020 年度 A セメスター)

UTokyo LAINAC
UTokyo Red Latinoamericana e Ibérica para la Colaboración Académica
La Universidad de Tokio
Komaba 3-8-1, Meguro-ku, Tokio, 153-8902, Japón

目次

交流のスケジュールと交流先のことが分かるサイト 2
オンライン研修という挑戦 3
活動報告 1　EDNICA との交流会を終えて 5
活動報告 2　メキシコの先住民族、オトミー移住者との交流 6
活動報告 3　メキシコで活躍される若手日本人のお話をうかがう会 7
活動報告 4　協定校 UNAM との交流 9
活動報告 5　メキシコの有機農家との交流 12
研修を終えて 1　「オンラインで再びメキシコに触れる」 14
研修を終えて 2　「オンライン研修と新たな目標」 15
研修を終えて 3　「画面越しのメキシコ」 16
研修を終えて 4　「コロナ禍とメキシコ研修」 18
研修を終えて 5　「コロナ禍ゆえに伝わる熱量」 20
研修を終えて 6　「身近になったメキシコ、日本への思い」 21
研修を終えて 7　「理解し、理解される喜び」 22
研修を終えて 8　「先住民の尊厳について考える」 24
研修を終えて 9　「交流とは何か：オンライン研修を通して見えたもの」 25
研修を終えて 10　「ビデオ作成を通した交流」 27
オンライン研修の利点と課題：メキシコ側の意見 28
先住民移住者 HP の翻訳例 28
編集後記 30

交流のスケジュールと交流先のことが分かるサイト

2020 年 11 月 14 日（土）7〜9 時

交流先：EDNICA（ストリートチルドレンの支援を行う NGO）

https://www.facebook.com/ednicaiap/

2020 年 11 月 20 日（金）10〜12 時

交流先：先住民移住者コミュニティ（オトミー）

https://www.facebook.com/OrgulloOtomiRoma/

https://orgullootomi.com.mx/

2020 年 12 月 19 日（土）10〜12 時 30 分

交流先：メキシコで働く若手日本人

https://www.mx.emb-japan.go.jp/itprtop_ja/index.html（在メキシコ日本国大使館）

2021 年 2 月 5 日（金）9〜11 時、6 日（土）9〜11 時

交流先：UNAM (Universidad Nacional Autómata de México)

http://enallt.unam.mx/

2021 年 3 月 3 日（水）8〜10 時

交流先：トラスカラ州の有機農家（Jaime Gaspar García 氏）

https://www.facebook.com/delmagueyal

※日付は全て日本時間

オンライン研修という挑戦

受田宏之（スペイン語分科・国際社会科学専攻 教授）

メキシコをフィールドとする研究者として、および LAINAC（東大ラテンアメリカ研究センター）のメンバーとして、ラテンアメリカを研修先とする国際研修をやってみようと奮起し、2016 年と 2018 年の春にメキシコへの研修を実施しました。ともに 16 名の学生を引率したのですが、協定校との交流に加え、農村や先住民移住者コミュニティ、日系自動車企業の工場など様々な場を訪れ、メキシコの多様さを知り、複雑さを味わうことにより、いずれの参加者にも有意義な経験となったはずです。

三回目のメキシコ研修は 2020 年の春に計画され、プレゼンや料理などの準備を受講生と進めていたのですが、新型コロナウイルスの感染拡大のため、渡航の直前にキャンセルとなりました。多くの受講生が 1 年後にぜひともメキシコに行ってみたいというので、2021 年度もほぼ同じスキームで研修を行う予定でした。ところが、死者数が世界第三位となるなどコロナ禍はとくにメキシコにおいて甚大な影響を及ぼし続けており、対面式研修の見通しは立ちません。やめようかと迷ったのですが、それではウイルスに負けたことになる、研修の灯が消えてしまうのではないか、とも思えました。そこで、日本にいながらオンラインで実施されている国際研修があるという話を聞いて、2020 年度 A セメにオンラインで第三回メキシコ研修を行うことに決めました。IT に疎い点、ずぼらなところは受講生に補ってもらいつつ、ZOOM を使って 5 回にわたり、協定校の学生や NGO、大使館や民間企業に務める日本人、先住民、コロナに負けず質の高い生産物を作り続ける有機農家との交流を図ることができました。私には、オンラインを通じた交流の限界と可能性について思いをめぐらすよい機会となりました。

オンライン研修の限界からみると、IT を通じて異なる時代や世界に抵抗なく接続してきただろう若い世代には、ZOOM を通じた研修が新鮮ではないことがあります。メキシコの多彩な風土を肌で感じとれないこと、ストリートチルドレンと彼らの支援者とに直に触れ合い議論できないこと、農家自慢の素材を使ったローカルな料理を堪能できないことは、研修の魅力を減じます。実際、受講生は 10 名にとどまり、うちキャンセルされた研修からの継続者は 4 名でした。みんなには移動制限のなくなったとき現地を訪れて欲しいですし、

それがメキシコの友人たちの望むことでもあります。

その一方で、オンラインが交流を促す点もあります。（14 ないし 15 時間という）日墨間の時差、双方にネット環境を整えることは考慮すべき条件となりますが、対面の場合と比べ移動費等がうくため、交流のハードルは下がります。メキシコで活躍する 6 名の若手日本人と学生が自由に語り合うことなどは、対面式の研修では実現しないだろう企画です。UNAM（メキシコ国立自治大学）との交流で PADLET に自分の情報をあらかじめ書き込んだり、互いに作成したビデオを鑑賞し合ったりすること、さらには先住民移住者の制作する民芸品を紹介する HP を英語と日本語に訳したことなどは、オンラインでなければあり得ないはずです。限られた選択肢の中から新たなものを引き出そうとする若い学生のしなやかな創造性を目にすることができ、挑戦が報われたと感じています。

活動報告１　EDNICA との交流会を終えて

村瀬正紘（教養学部教養学科地域文化研究ラテンアメリカ研究３年）

日本時間 2020 年 11 月 14 日午前 7 時(メキシコ時間 11 月 13 日午後 4 時)から、現地のストリートチルドレンを支援する NPO である EDNICA との交流会が行われました。今年度のメキシコ研修における現地の団体との交流はこれが最初の機会でした。ZOOM を使ったオンラインミーティングであり、日本とメキシコで時差が 15 時間ほどある中で双方の予定を考慮して日程が調整されました。

交流会が始まると、まずベテラン職員である Bertha Bocanegra さんから EDNICA という組織や活動について説明がありました。ストリートチルドレンとは、家族からは離れ路上に住んでいる子どもたち（彼らはストリートチルドレン全体の中では少数派だそうです）だけでなく、家計を支えるため物を売るなど一日の多くの時間を路上で過ごす子どもたちも含みます。その問題は人権侵害や薬物使用にまで及んでいます。さらに深刻である点は、こうした問題を当事者個人による取り組みのみで解決することが困難である点です。多くのストリートチルドレンは教育を受ける機会を失ってしまい、将来自立した尊厳ある生活を送ることが難しい状況になっているのです。EDNICA ではこうした負のスパイラルを断ち切るため、ストリートチルドレンの問題を個人のレベルだけでなく家族やコミュニティのレベルでの問題としても捉え、包括的な支援を行っているとのことでした。

EDNICA についての説明のあと、Bertha さんは日本の学生側からのいくつかの質問に答えてくださいました。その中で、EDNICA の活動で何が大変であるのかという質問に対し、子どもたちの通学を促したり、公立学校の不十分なところを補う様々なサポートを行うことが主な取り組みであるが、そのためには子どもたち自身とその家族との信頼関係の構築が不可欠であり、職員が時間をかけて信頼構築のための活動を行っていると答えられ、長い時間をかけて地道に行わなければならない支援の大変さを知りました。

私たち学生の方からは、日本で行われているこども食堂の活動を簡単に紹介しました。メキシコのストリートチルドレンに対し、日本の恵まれない状況にある子どもたちの多くは一見すると普通の子どもと同じ生活を送っておりながらも、相対的な貧困や家庭内の問題に苦しんでいて、「見えにくい」「発見しづらい」存在といえます。そのような中、地域全体で子どもたちに温かいごはんと共に居場所を作ってあげることがこども食堂の目的であることを伝えました。こうした交流を通して、子どもに対する支援を社会全体で行う必要性を感じました。

活動報告２　メキシコの先住民族、オトミー移住者との交流

穐吉万紘（教養学部文科 II 類 2 年）

日本時間 11 月 20 日（メキシコ時間 11 月 19 日）に ZOOM を用い、オンラインで行われた。寒い日、また、メキシコの時間では夜の時間帯の開催であったのに、パソコンの画面に映り切らないほど、多くの人が参加してくださった。日本人との交流は珍しいため、オトミーの方も楽しみにしてくださっており、大変貴重な交流となった。

最初は他愛のない会話から始まり、続いて私たち学生からの質問に答えていただくという形で、オトミーの文化や現状の話へと移っていった。オトミーの方々は易しいスペイン語で話してくださった。

東京大学の学生からは、現在の状況から少数民族であるということにより差別のようなことを受けた経験があるのかといったことまで、様々な質問が出た。もともとオトミーの方々は、観光客を相手に伝統衣装の格好をした手作りの人形を売るなどしていたが、COVID-19 の感染拡大の影響により、観光客が来なくなっているという状況であった。現在はオンラインで販売もしている。

文化については、参加者の中に伝統衣装を着ていらっしゃる女性がおり、そこから何代も受け継がれている伝統衣装のことや、都市でも料理は母親から受け継がれやすい、ということなどへと話は発展していった。

この交流で特に印象に残ったことは、高校生の方の、コロナ下での学習環境についてのお話だ。メキシコでは高校の授業は対面ではなくオンラインで行われている。しかし、彼の場合も含め多くの家庭ではネット環境が整っておらず、学校の授業に常時出席できない状況なのだそうだ。通信料を払うためにアルバイトをしなければならないため、学校の授業に参加できないという矛盾した状況に置かれてしまっている学生は少なくないのだそうで、授業に出ないと勉強についていけなくなり、内容がわからなくなったり先生に怒られたりして、より授業に出たくなくなってしまうという悪循環が生まれており、彼もその 1 人なのだと聴いて、こうした話はこれまでにテレビの特集で耳にしたことはあったが、実際に経験されている方の話を聴き、今の自分の状況が恵まれたものであることを実感した。

最後に、上で述べた、民芸品の販売などを行っているオトミーのホームページの英語訳、日本語訳をお手伝いすることになった。COVID-19 の拡大という大変な時期ではあるが、今回の交流は私たち学生にとってかけがえのない時間となった。オトミーの方々にとってもそうであったことを願う。

活動報告３　メキシコで活躍される若手日本人のお話をうかがう会

小野仁子（教養学部文科Ｉ類１年）

日本時間 2020 年 12 月 19 日（メキシコ時間 2020 年 12 月 18 日）に行われた、メキシコで活躍されている日本人との交流プログラムでは、メキシコの電力会社勤務の磯部達也さん、銀行勤務の済藤滋子さん、マツダ勤務の前島健さん、そしてメキシコ大使館の坂井達弥さん、辻裏雅宏さん、北條真莉紗さんの 6 名にお話をうかがった。まず全体で 6 名のキャリアやメキシコでの暮らし、コロナ禍の地域の様子などについてうかがった後、ブレイクアウト・セッションで質疑応答を行い、アドバイスなどをいただいた。

全体でのお話では、6 名の方それぞれが独自のキャリアを築いていらっしゃって、それぞれに目標や仕事観を持ち仕事に臨まれていることが印象的であった。中でも筆者にとって印象深かったのは、サッカー業界での仕事を経験し、現在は電力会社に務める磯部さんが話されていた、どんな仕事も社会に貢献しているから、どんな仕事が自分にできる社会貢献なのか考えることが大事というお話だった。コロナ禍において、磯部さんの会社では作業員が最小人数で 2 週間発電所に泊まり込む体制をとっており、その間家族や知人、友人に会えないのはメキシコ人にとっては特に辛いとのことであった。そうした犠牲を払いつつも、広く多くの人の役に立ち、社会に貢献できる仕事が今の仕事だという言葉に、磯部さんの仕事に対する責任感を感じさせられた。

また、メキシコ人の抱く日本人像についてうかがったところ、勤勉で真面目だとか、道徳や価値観がしっかりしているといった見方が多いそうで、日本人はいいイメージを持たれているという話をされる方が多かった。一方、銀行勤務で現地の方と結婚されている済藤さんのお話では、旦那さんには「日本人は意見を言わない、なんでそんなに黙っているんだ」と言われることもあるそうで、文化の違いによるコミュニケーションの難しさもあるのだと感じた。また済藤さんは、現地採用の日本人として、メキシコ人の上司と日本から来た上司の間に立たされることが大変だとおっしゃっていて、仕事観や価値観の違うメキシコと日本の間に立って働くがゆえの難しさもうかがえた。

ブレイクアウト・セッションでの質疑応答では、メキシコ大使館で専門調査員として働く

北條さんのお話が特に興味深かった。北條さんは将来国連で働くことを目指しており、その要件を満たすために大使館で働いているとおっしゃっていたため、筆者個人の悩みとして、本来やりたい仕事とそのためにやらなければいけない仕事が違う場合、やらなければいけない仕事にどう向き合うべきかをうかがった。北條さんは、国連で働くことを目指すのは変わらないが、今の仕事には今の仕事のやりがいがあると話してくださった。何より、専門調査員の仕事について話される時の北條さんの生き生きとした様子を見て、非常に勇気づけられた。

このプログラムでは、全体を通じてメキシコで働く日本人であることの難しさと面白さを垣間見ることができた。また、近い将来社会人になる身として、様々な分野で働く社会人の先輩方のキャリアや仕事観についてうかがえたことは良い刺激になった。

活動報告 4　協定校 UNAM との交流

板倉渉（教養学部文科 III 類 2 年）

日本時間 2021 年 2 月 5 日・6 日（メキシコ時間 2021 年 2 月 4 日・5 日）に、UNAM（メキシコ国立自治大学）で日本語を教えられている長尾和子先生をはじめとする先生方の協力のもと、同校で日本語を学んでいる生徒との交流会が実施された。交流参加者の情報を事前に PADLET 上で交換し、5 日（1 日目）にはグループディスカッションを、6 日（2 日目）にはレクリエーション主体での交流を行なった。実際のプログラムは以下の通りである。

【2 月 5 日のプログラム】
グループディスカッション「コロナ禍にどう立ち向かうか」
(1) 人間関係について
　—お互いの国でどうやって友達を作るものなのか
　—バレンタインデーの過ごし方
　—その他友人、恋人、家族関係について
(2) 勉強のやり方、時間の使い方
(3) お勧めの言葉の学び方（映画やドラマにも言及）

【2 月 6 日のプログラム】
双方の参加者数名のプレゼンテーションまたはビデオの発表、およびコメント
(1) サイコロゲーム（熊木）
(2) 東大の学生によるビデオ発表
　—上野公園（板倉）
　—日本家屋（近藤）
　—造り酒屋（武藤）
(3) 早口言葉ゲーム（近藤、長尾）
(4) UNAM の学生によるプレゼンテーション
　—メキシコの妖怪（ウンベルト）
　—メキシコの文化（オルランド）

1 日目

グループディスカッションは ZOOM のブレイクアウトルーム機能を用いた形式で行われた。テーマは「コロナ禍にどう立ち向かうか」で、具体的にはコロナ禍における人間関係の形成、勉強のやり方と時間の使い方、おすすめの言葉の学び方などに関して日本語とスペイン語で議論を行なった。交流はかなり活発で、勉強の仕方について話し合っていたら最終的にはスペイン語の俳句についての議論に発展したグループもあったということであ

る。他のグループでもレゲトンの話題で盛り上がるなど、双方にとって有意義な時間を過ごすことができたのではないだろうか。

筆者としてはスペイン語があまりうまく話せず、会話についていくのに苦労した。しかしながら、後半には少しばかり UNAM 側の参加者の言葉がわかるようになり、生のスペイン語を聞く機会を持つことの重要性を認識した。また、UNAM 側の参加者の日本文化に向ける情熱は凄まじく、日本語の熟達具合もかなりのものであった。「ラブコメ」などの和製英語・略語を知っているメンバーもいたほどである。言語学習者としても大きな刺激を受けることができ、良い交流であったように思う。

UNAM との交流の写真

2 日目

プログラムは、東大・UNAM 双方の学生が用意したビデオとプレゼンテーションを鑑賞し、相互にコメントしつつ、それらの合間にアイスブレークとしてのゲームを挟むという、交流を楽しむことに重点を置いたものであった。

東大側のビデオのテーマは「日本家屋」、「上野公園」、「造り酒屋」である。「日本家屋」のビデオでは、瓦や畳など日本建築に必要不可欠な要素が詳細に解説されていた。「上野公園」では、都心に存在する自然豊かな上野公園、またその周辺地域の見所が紹介された。「造り酒屋」は、日本酒とその作り方についてその作業の様子も含めて紹介する素晴らしいビデオであった。いずれも日本で見られる風景や文化に言及した興味深いテーマであり、UNAM 側の参加者たちにとって日本をより深く知るきっかけになったのではな

いかと思う。

UNAM 側のプレゼンテーションのテーマは、「メキシコの妖怪」と「メキシコの文化」であった。「メキシコの妖怪」では、メキシコに伝わる怪談話のようなものをいくつか紹介していただいた。「メキシコの文化」では、メキシコシティのソウマヤ美術館やメキシコの日常的な料理であるポソレなど、メキシコに特徴的な文化についての解説をしていただいた。筆者個人としては、水辺に出没し、¡Ay mis hijos!（あぁ、私の可愛い子！）と嘆くラ・ジョローナ（泣く女）の話が彼女の生前の悲しいエピソードも相まって印象的であった。

合間に行なったゲームは、「サイコロゲーム」、「早口言葉」である。「サイコロゲーム」はサイコロをふって出た数字に対応する話をするというもので、緊張した全体の雰囲気を和らげてくれた。「早口言葉」では日本の代表的な早口言葉を皆で一緒に暗唱してみたり、メキシコの trabalenguas（日本でいう早口言葉）を楽しんだりした。

活動報告 5　メキシコの有機農家との交流

【前半・日本の農業紹介編】

鶴山和人（農学部生命科学課程 工学専修 3 年）

動画で日本の小規模の有機農家についての紹介をした。最初に筆者が国造ゆずのコミュニティ「ゆずいろのくに国造」の紹介、次に川瀬さんが同じ石川で活動する有機農家「風来」の紹介をした。

国造ゆずは、石川県能美市の国造地区で、無農薬で栽培されているゆずで、「安心して丸ごと楽しんでもらえるゆずを届けたい」という思いから 35 年間無農薬による栽培が続けられている。「ゆずいろのくに国造」はそんな国造ゆずを広めたいという思いから、和菓子店や蜂蜜農園、地域外の大学生など農家以外の方の協力で広がっていくコミュニティだ。メキシコにはまだそういったコミュニティが少なく自分たちだけで販売を行っているので、彼らの経験が役に立つのではないかと思い紹介した。

「菜園生活風来」はとてもユニークな農家で、わずか 30 坪という日本の農家の平均耕地面積の約 10 分の 1 の土地で野菜を栽培している。「風来」のマネージャーの源さんという方は、ごく小さな土地（0.3ha）である分、「サービス提供者」として、美味しく安全なものを毎日買い続けて食べられる価格で提供するよう考えている。源さんはそのためにオンラインストアを使って直接消費者に生産物を届けることで、売り上げだけでなく信頼も得ているのだ。源さんの農業の固定観念を壊すと言う考えは、メキシコ農家の方にも響いたのではないだろうか。

マゲイの育ち具合を確認する Jaime Gaspar García 氏

動画はスペイン語での紹介だったため 2 人とも苦戦したが、受田先生やメキシコ農家の方達から評価していただけて非常に嬉しかった。対面でスペイン語を使いながら日本、メキシコの農業について話したかったが、オンラインでこのような機会が得られたのは有意義

だった。

【後半・交流編】

川瀬翔子（農学部環境資源科学課程 農業資源経済学専修 3 年）

Tlaxcala 州 Españita 郡 Álvaro Obregón という集落で、マゲイという当地の伝統的な作物や他の作物を複合的に栽培しておられる農家の Jaime＆Adriana García ご夫妻とその息子 Adrian さん、さらに中学 2 年生の孫の Xade さんの 4 名からお話を伺った。

マゲイはメキシコの高原地帯に自生する多肉植物で、葉からとれる汁は甘みがあり、煮詰めてシロップにしたり砂糖のように用いたりすることができるという。また、マゲイの汁を発酵させるとお酒を造ることができるそうだ。最近は新しい種類のマゲイの栽培に挑戦しており、その汁を蒸留させたら美味しいお酒になった、とペットボトルに入った実物を飲んで見せてくださった。

また、コロナによる影響に関しては、なんとご夫妻の両方がコロナに感染したとおっしゃっていた。ZOOM でお話を伺った際にはお元気そうな様子だったが、メキシコ国内は感染者数が 2000 人を超える日が続いており、予断を許さない状況だという。特に農村部は貧しい人が多く、息子の Adrian 夫妻が住む村の場合、一日に 1 度の食事で日々をしのいでいる場合もあるそうだ。そのような状況では、感染症が発生した場合にその拡大を防ぐことが簡単でないことは容易に想像がつく。

交流会を通して、Jaime さんたちが有機農家としての誇りをもって農業に関わっておられ、六次産業化ともいうべきマゲイの加工品販売にも乗り出していることがわかった。学生からの質問にも一つ一つ丁寧にお答えいただき、双方にとって実りの多い時間となった。惜しむらくは、美味しい手料理やマゲイのお酒を実食・試飲する機会が得られなかったことである。コロナの流行が終息しメキシコへの渡航が可能となった暁には、ぜひ現地を訪れて生活の様子を自分の目で見、食文化を舌で感じてみたい。

マゲイなどを原料とする加工品の数々

研修を終えて１　「オンラインで再びメキシコに触れる」

六車梨夏（教養学部文科Ｉ類１年）

今回のメキシコ国際研修では、オンラインという制約がありながらも、遠く離れた国の人々の暮らしや活動、文化に触れることができ、非常に貴重な経験をした。そもそもこのメキシコ国際研修に参加したのは、幼い頃にメキシコに住んだ経験があり、当時の自分にはわかりえなかったことについて学び、メキシコの雰囲気の懐かしさを味わってみたいと思ったことが理由であった。しかし、今回の研修を通して、全く新たな視点で、メキシコという国をさまざまな切り口から理解し、たくさんの知識や見解を得ることができた。同時に、現地に住む方々との交流を通じて、それまでは知りえなかった彼らの価値観や彼らの抱える問題に気付かされた。

私にとって特に印象的であったのはメキシコで働く若手日本人との交流であった。若手日本人の方一人ひとりがどのような経緯でメキシコに渡り、どのような仕事をされているか直接お話を聞くことができ、普段は関わりがなくても、同じ日本人が遠く離れた地で活躍していることが非常に刺激となった。また、コロナ禍の生活や悩みなどについて互いに共有しあえたのも、インターネットというツールがあってこそ実現したことであり、この点はオンライン研修ならではの良さなのではないかと感じた。

他の交流に関しても、オンラインであったものの、画面越しに見える現地の人々の姿や背景の様子、聞こえてくるネイティブのスペイン語から意外にも十分に臨場感を味わうことができ、距離や言語の壁を超えたやりとりができた。直接現地を訪問し、交流することができなったのは残念ではあるが、非常に有意義な研修に参加できたことを嬉しく思う。今回の研修によって、現代のメキシコへの理解が深まったと同時に、さまざまな面においてさらに興味を抱くきっかけとなり、視野を広げることができたように感じる。コロナ禍でグローバルな繋がりが薄れていく中、このような機会に恵まれたことに感謝している。

研修を終えて２　「オンライン研修と新たな目標」

小野仁子（教養学部文科 III 類 1 年）

今回のメキシコ国際研修には成り行きで参加することとなった。いつか留学をしたいと思いつつも自分が何を学びたいのか分からず行き先も絞り込めずにいた時に、メキシコの人々と交流できるというこのオンライン研修の存在を友人から聞き、オンラインならば実際の渡航より気軽に参加できるだろうということで参加を決めた。今回の研修はオンラインによる制約も多かったが、私にとってはオンラインだからこそできた体験であり、勝手ながらこれも縁だったのだろうと思っている。結果としてメキシコ国際研修は、目的意識がぼんやりしていて海外渡航の決断がなかなかできなかった私に、いつか実際にメキシコに行って現地の空気を吸い、現地の人と話してみたいという明確な目標をくれた。

研修プログラムの中で特に良い刺激となったのは UNAM の学生との交流である。国や文化を超えて、同じコロナ禍で学生生活を過ごす者として互いの体験や学習していることを共有できたことは今しかできない貴重な経験となった。中でも UNAM の学生によるスペイン語の俳句が非常に印象的であり、異言語・異文化の接触からこのような綺麗な作品が生まれてくることに驚いた。また、言語学習の面でも UNAM との交流は実りあるものだった。向こうの学生は日本語が非常に堪能であり、学習歴 1 年足らずの私のスペイン語とは比べ物にならなかったが、母語でなくとも積極的に喋ってコミュニケーションを取ろうとする姿勢は言語学習の後輩として見習いたいと思った。一方、その場で考えたことをスペイン語で話すことは想像以上に難しく、思うように意見を伝えることができずにもどかしさを感じることも多かった。とは言え、言語の壁がありながらも、日本に閉じ籠っていては考えもつかないような様々な話を聞くことができた UNAM との交流会は非常に楽しく、スペイン語の勉強を続けていつかメキシコに行った時にはもっと色々な話を聞きたいと思った。

メキシコ研修で現地の人々の生活や文化について学ぶことを通して、私は二つの目標を見つけた。一つ目は、いつか留学など何らかの形でメキシコに行き、現地の人々と交流することだ。二つ目は、それまで更にスペイン語を勉強し、より多くの話を理解できるようになるとともに、日本や東京の文化と人々のことを伝えられるようになることだ。今までは留学や海外渡航についても漠然と考えているばかりだったが、少し勇気を出して行動を起こせばきっと素晴らしい体験ができるという期待を持つことができたという意味でも、この研修は非常に収穫が大きかったと言えよう。最後に、受田先生、並びにこの研修に関わってくださった全ての方々に感謝の意を述べたい。ありがとうございました。

研修を終えて３　「画面越しのメキシコ」

武藤彰宏（教養学部文科Ｉ類２年）

2020 年度の 1 年間は、ほぼ全ての履修科目がオンライン開講となり、それは国際研修も例外ではありませんでした。国境封鎖・渡航制限で学修に対するモチベーションや興味がドメスティックなものに偏っていたので、実のところ当初は研修に対する期待はそれほど大きくなく、半ば逆張りのような心持ちで参加しました。しかし、オンラインでの研修で触れたメキシコの人々の言葉やプレゼントといった一次情報は、私のメキシコへの興味関心を一層掻き立て、想像以上に濃密で有意義なものとなりました。

とりわけ多くのものを学んだのは、ストリートチルドレンの支援組織（EDNICA）との交流でした。EDNICA では、出生や家庭の事情で路上生活や児童労働を強いられている子ども達に対して、教育や職業訓練へのアクセスを提供し、自立と生活水準の向上を支援しています。特徴の一つに、親や保護者といった子どもを取り巻く人々への包括的な支援や、既に成人を迎えた世代への継続的な支援活動が挙げられます。今でこそ日本では児童労働の問題は消滅しましたが、望まぬ妊娠・出産や無戸籍、児童虐待は依然として社会全体の課題であり、公的機関をはじめとした支援が続けられています。一例として、教育相談所での調査・支援や児童養護施設での養育が挙げられますが、こうしたいわゆる「公助」は 18 歳未満（高校卒業まで）の未成年者に対象が絞られており、支援の包括性・継続性は EDNICA に学んだ制度設計が必要ではないかと思います。コロナ禍が継続的な支援に与えたダメージは小さくありませんが、ミクロの単位で懸命に取り組んでいる姿に自分にも何かできることはないかと考えさせられました。

メキシコに学ぶ、メキシコから学ぶという観点では、メキシコで暮らす日本人との交流からも得るものは大きかったです。駐在員、外交官、現地職員と様々な現場で働く彼らは、メキシコと日本の雇用・商習慣の違いに頭を悩ませつつも、誇りを持ってキャリアを切り拓くことの意義を伝えてくださいました。一口に日墨の架け橋になるといっても活躍するフィールドは広いこと、また時として両国の間で板挟みになりながらも文化や価値観のギャップを地道に埋める仕事の難しさをひしひしと感じました。リモートではありましたが、メキシコをベースにさまざまなキャリアを持つ日本人が一堂に会し、メキシコへの

留学やその後のキャリアを考える貴重な経験でした。

オンライン研修で一つだけ心残りなことを挙げると、美味しいと評判の本場メキシコ料理を食べられなかったことです。在宅での研修には移動の必要も時差ボケもなく、身体的な負担は小さいものの、味、香り、気温湿度といった現地の空気を五感で習得するには大きな制限がありました。それでもなおメキシコの気候・文化・社会の多様さに触れられたことに大きな成果があったと感じています。企画立案、メキシコ側との調整・支援を行って、実り多き研修を実現してくださった受田先生、私たちへの熱心な講義と丁寧な質疑応答までしてくださったメキシコの皆様、授業をともに受けてくださった履修生の皆さんに深く感謝しています。ありがとうございました。

研修を終えて４　「コロナ禍とメキシコ研修」

熊木雄亮（教養学部文科 II 類 2 年）

今回の研修に対する私の考えを記すために、前年度参加したメキシコ研修に言及することは不可欠であろう。私がオンラインでのメキシコ研修をとったのは、前年度コロナウイルスの影響で突然中止になったメキシコ研修に再び臨みたいという紛れもない理由からであった。前年度は、教養学部として当時の年度内の国際研修を全て中止にするという衝撃の連絡が、我々の渡航予定日のわずか 3 日前に伝えられた。当時はその後まさか研修までの半年の準備がほとんど無になってしまうことどころか、研修メンバーと再び会うことも叶わず、従来ごく当たり前であった完全な対面授業の形式も一年以上失われるとは誰も予想していなかった。それから半年後、今年度も実際にメキシコを訪れることはやはり不可能であれども、半年にわたるコロナ禍での生活から、オンラインでの海外研修にも新たな形の交流や学びの可能性があることがわかってきた。今年度は、夏期に行われたオンラインでの TLP 研修の経験を参考に、新しい形態でのメキシコ研修が始まった。

メキシコ研修で感じたことの一つは、メキシコの方々と実際に交流できた喜びであった。スペイン語は国際的に話者や学習者が大変多く存在する一方、日本では英語やアジアの言語に比べてあまり耳にしたり見かけたりする機会が少ない言語だ。そのため昨年度も今年度も、私にとってメキシコ研修は、言語学習の域を超えてスペイン語を活用できる貴重な機会であり、自身のスペイン語学習の重要な動機であり続けた。実際研修では、日本・メキシコ双方の先生や研修メンバーにも多々助けていただき、私のスペイン語は拙くとも、それを苦痛だと感じずに用いることができた。私と同じ年頃であるメキシコの大学生や、ストリートチルドレンを支援し続ける方、長年先住民の移住者を率いてきた方など、様々な人と交流できたのは貴重な機会であったし、スペイン語の学習や各々の専門に打ち込んでいる周りの研修メンバーの姿は刺激的であった。

もう一点今回の研修でわかったことは、やはりコロナ禍で苦しむメキシコの姿であった。医療機関が逼迫し、経済が大きく傾き、社会不安がメキシコを覆う中で、貧窮した生活に苦しんだり、人との交流の欠如に陥ったりしている様子などが、オンラインでも見えてきた。

自分と同じ大学生が、友人と会いキャンパスで勉強するという以前ではごく当たり前であった生活を望んでいた様子を見ると、一方で私もその気持ちを大変共感でき、また一方でメキシコの現在の状況は日本よりもさらに深刻であるとも感じられ、彼らの辛い気持ちがひしひしと伝わってきた。

前年度から今年度にかけては、まさに大きな「変容」であった。コロナ禍での生活はやはり耐え難いが、この人類の生活・考え方の転換期を目の当たりにする時代の目撃者として、新たな学びの形式を活用しながら、これからも学びを深めていきたいと思う。メキシコ研修の魅力の一つは、先生や TA の方のサポートのもと、様々な学部、学年の生徒と共に、日本語やスペイン語を軸に研修を通じて学びを深められることであり、それだけはこの一年半で変わらなかったことを大変嬉しく思う。改めてこの一年半、お世話になったメキシコの方々や先生方、研修のメンバーには感謝の気持ちでいっぱいである。

研修を終えて５　「コロナ禍ゆえに伝わる熱量」

板倉渉（教養学部文科 III 類 2 年）

今回の国際研修は、コロナ禍ゆえにオンラインというかなりイレギュラーな形で実施された。行われた交流の全ては画面越しであり、互いに不自由も多かった。勿論、高山性のメキシコの気候を肌で感じることはできなかったし、食べ物を実際に味わうこともできなかった。現地の人と交流し、談笑することなどありえるはずもない。対面を重視する本研修は、例年に比して参加する意義の小さいものだと断じてしまうことも可能であろう。しかしながら、私はそのような感想を抱くことはない。コロナ禍だから、画面越しだからこそ輝く人々の姿を見ることができたと思うのである。

今回の研修で最も印象的だったのは、UNAM（メキシコ国立自治大学）の学生との交流会である。UNAM 側の参加者は日本語に堪能で、「そうねぇ…」と、日本語的な感嘆詞を使いこなすほどであった。また彼らは語学的な知識のみならず、漫画・アニメなど日本の文化にもかなり精通していた。画面越しながらも彼らの日本への熱がビリビリと伝わってくるようである。しかしながら、彼らの話をよく聞くと、UNAM は閉鎖された状態が続いているとのことで、彼らもまた私たちと同じように困難な環境に置かれているのだという。そのような状況でこれだけの努力ができる UNAM の学生の不屈の強さ、またそれを可能にしている日本理解へのモチベーションは驚くべきものであった。このような刺激は、画面を通しての交流会だからこそより強く感じられるものではないか。

研修では、そのほかにも多くの団体と関わった。例えば、先住民コミュニティの方々と先住民を支援する人類学者と接した際には、UNAM の学生といった層とはまた違う人々の生活を垣間見た。商業のためのインターネット利用が不可欠となる社会が到来しネットへの迅速な対応を迫られる中で、困難に直面しつつもどうにか乗り切ろうという彼らの気概は私の中にも熱いものを残した。コロナ禍だったからこそ見ることができた、メキシコの人々の素晴らしい一面である。

個人的な反省点としては、自身のメキシコに関する予習やスペイン語の学習が不足していたという点である。論文を読み込むことがあまりできず、メキシコの方々に効果的な質問をすることができなかったことは大きく悔やまれる。また参加する機会があるのなら、UNAM の学生の如くラテンアメリカ文化圏への熱量を存分に見せ、研修の運営に貢献したいと思う。誘ってくださった近藤さんや、至らぬ私を助けてくださった受田先生には感謝しています。ありがとうございました。

研修を終えて６　「身近になったメキシコ、日本への思い」

穐吉万紘（教養学部理科 II 類 2 年）

昨年度のメキシコ研修に参加していたが、COVID-19 の感染拡大により中止せざるを得なくなった。対面での実施は今年度も困難ということではあったが、昨年度メキシコについて色々調べるなど準備していたことが少しでも活かせたら、またオンラインであっても現地の方と交流できるのならば是非したい、と思い参加することにした。

実際、メキシコの料理を食べたり、においをかいだりはできなかったが、現地で暮らしている方のお話を聴く、コミュニケーションをとることができたという点で、やはり参加してよかったと感じた。

日本にはない、ストリートチルドレンを援助する NPO や先住民族のコミュニティと交流できたことはとても貴重であった。日本にはないことを知ることは、国際研修の大きな意義の一つだからだ。

他にも、国際研修ならではの貴重な出会いがあった。それは、協定校 UNAM の学生たちとの交流で、同じ大学生として今の状況をどう過ごしているかを共有することができたことだ。また、日本のどんなところに興味を持っているのかを複数の人から聴くことができたのも大変興味深かった。大学内で留学生を見かけることはあっても、話しかけるだけの勇気はなかった。スペイン語を母国語とする人と話した経験もなかった。それゆえ、今回のように、お互いに話したいと思えることを話せる場に参加できたことは非常に良い経験だったと思う。UNAM の学生の皆さんは本当に優しくて、楽しい時間を過ごすことができた。さらに、質問をしたり話を聞いたりするだけでなく、日本の家屋やお酒といった文化を紹介したり、子ども食堂といったメキシコで活かすことができそうな日本の活動を紹介したりすることで、お互いにとってより良い交流となったと感じた。東大生の側からのプレゼンを聞いて、日本にもこんなに良い文化や営みがあり、大切にしなければならないと再認識することができたからだ。

最後になりましたが、メキシコ研修に参加してくださったメキシコの皆さん、プレゼンや企画などで交流をより実りのあるものにしてくださった東京大学の学生の皆さん、そして、何よりこの授業を開講してくださった受田先生、本当にありがとうございました。

研修を終えて７　「理解し、理解される喜び」

近藤晏誉（教養学部教養学科地域文化研究ラテンアメリカ研究３年）

私が国際研修に参加した目的は、自分のスペイン語の力を試すこと、メキシコという国家に暮らす人々の生の声を聞くことの２つであった。私は、３年かけて学んできた自分のスペイン語がどれほど使い物になるのか、明確なイメージを抱くことができていなかった。また、教養学部中南米科に所属する私としては、メキシコという国家について幾らかの知識はあるが、実際に交流することでその暮らしや文化の実態を少しでも感じたかった。そうした目的で参加した今回の研修は、多くを経験し、また自覚し、メキシコへの認識を改める契機となった。

スペイン語に関して言えば、私のスペイン語は理解された。EDNICA の方へ尋ねた質問や、オトミー・コミュニティの HP の内容について述べた提言はやや複雑な内容であったが、私が意図した発言内容をしっかりと理解してもらえたことが正直なところ驚きであり、自信にもなった。UNAM との交流の際には、一転してカジュアルな雰囲気の中での会話を楽しんだ。バレンタインデーの話題で盛り上がり、両国の文化の差異の一端を知る興味深さに加えて、異言語で会話のキャッチボールを成功させることの単純な喜びを実感した。

研修で出会った人々は、多民族国家メキシコを象徴するかのように多様であった。さまざまな立場やコミュニティの中で活動している彼らと会話を交わすたびに、「彼らはメキシコの社会構造の中で確かに生きているのだ」という一見当然に思えることを、実際の肌感覚とともに理解した。つまり、中南米科で学ぶ日々において、メキシコは客観的文字知識の集積として私の脳内に描かれる国家であったのだが、この研修で、それは確かに意思疎通ができる人々が暮らす世界であると思い知ったのである。ストリートチルドレンを支援する EDNICA、出身村を離れメキシコシティで暮らすオトミーは問題に向き合い、希望を見出し、またそれを私に訴えかけてきた。そして、いま、メキシコで起こっている COVID-19 蔓延の現状が、グッと身近に感じられた。この感覚は、かつて宮城県石巻市に出向き、復興ボランティアに参加したときのものと共通であると気づいた。間接的に伝えられる無機質な情報が、感情の色彩を帯びて、主観的な物事として私の中で捉え直されていくのである。実際に

その社会、その世界の中にいる人とコミュニケーションをして関わりを持つことがその転換のトリガーなのだ。

この研修は私にとって、自分のスペイン語への自信、そしてメキシコの社会とその中で暮らす人々への認識を一層深めるものとなった。学びの対象に直接的に関わることの重要性を痛感するとともに、これからの姿勢が変わり、学びはより有意義なものになっていくのだろうと確信している。最後に、この機会をくださった受田宏之先生、研修先のメキシコの皆様、ともに研修をした学生の皆様に深く御礼申し上げる。

研修を終えて８　「先住民の尊厳について考える」

村瀬正紘（教養学部教養学科地域文化研究ラテンアメリカ研究 3 年）

メキシコ研修に参加したのは、すでに研修に参加していた学科の同級生である近藤くんに誘われたのがきっかけでした。私は国費留学制度を利用してメキシコに留学することを考えていましたが、コロナ禍による影響で留学が難しい状況となってしまいました。現地に滞在して学ぶチャンスが失われてしまい、寂しく思っていましたが、このメキシコ研修を通じて現地で働く様々な団体の方々にオンラインで話を聞くことができると知って、少しでもメキシコについて学びを深められたらと思い、参加しました。

研修ではストリートチルドレンを支援する NPO、先住民コミュニティ、メキシコで働く日本人の方々、日本語を勉強しているメキシコの学生たちなど、多種多様な方々と交流をすることが出来ました。

なかでも印象に残ったのは先住民コミュニティとの交流です。メキシコシティに移住してきたオトミー族という先住民のコミュニティが、彼らが話し合いやイベントに使う共用スペースからビデオをつなげてくれました。彼らは今から約 30 年前の 1994 年にメキシコシティに住むようになり、水場を見つけるところから住環境の整備が始まったそうです。最初の 10 年ほどは段ボールやトタンで出来た家に住んでいて、さまざまな「闘い」を経て現在のような vivienda digna（尊厳のある家、4 階建ての共同住宅）に住むことができるようになったと言います。彼らが生活基盤を整えるまでには壮絶な歴史があったのだと思わせられるようなお話をうかがうことが出来ました。また、メキシコ側には Alonso Guerrero さんが同席していました。彼はオトミー族についての研究をしている人類学者で、今回のオトミー族の住民との交流をコーディネートしてくれました。先住民の人たちと強い信頼関係を築いているところに、先住民や研究に対する彼の情熱が感じられました。

今年の研修では直接メキシコを訪れてこうした現地の人々に会うことは出来ませんでしたが、普段の勉強ではまず知ることの出来ない生の声を聞く経験は私にとってとても貴重なものとなりました。研修に参加された学生の皆さん、交流会でお話を聞かせてくださった現地の方々、そして交流の場を作ってくださった受田先生、ありがとうございました。

研修を終えて９　「交流とは何か：オンライン研修を通して見えたもの」

川瀬翔子（農学部環境資源科学課程 農業資源経済学専修３年）

本来は 2020 年 3 月に予定されていたメキシコへの渡航が、COVID-19 の影響で直前にキャンセルとなった。考えてみれば、私にとって、メキシコへの渡航中止が COVID-19 に関する一連の騒動の幕開けであった。年度が変わっても状況は改善せず、大学の授業がオンラインに突入した 2020 年度、メキシコ国際研修もオンラインで実施されることとなった。以下では、オンライン研修において感じたメリットとデメリット、そして研修を通して学んだことを述べてみたい。

まず、オンライン研修のメリットとして、各人が無理のない範囲で参加できることや、空間的な距離を飛び越えてリアルタイムで交流をおこなえることが挙げられる。実際、今回の研修では、複数のテーマの中から各人が関心のあるものについて選択し、参加できる範囲で交流会に参加するということが可能であった。授業のための準備においても ZOOM でのミーティングや共有ドライブが活用され、それぞれのルーティンや用事を大きく乱すことなく用意を進めることができた。また、言語という面でのハードルも比較的低くなった。リアルタイムでの交流では、わからない単語があってもその場で調べることは難しいが、オンラインの場合には手元の辞書やスマートフォンで検索できるからである。ただし、伝わらないながらに一生懸命スペイン語を話すという経験をする機会が失われたという意味では、これはメリットでもありデメリットでもあったといえる。

その一方で、オンラインでの交流の課題も複数浮かび上がった。まず、現地に行かなければ味わうことができない雰囲気が ZOOM 上では遮断されてしまう。ここでの「雰囲気」には、料理の味はもちろん現地の空気の匂いや大気中の湿度なども含まれる。このような言語化できないもの、体験するほかないものが伝達できないことはオンライン交流の最大の難点である。また、人との繋がりという点でもオンライン交流は対面での交流に劣る。メキシコのように異国との交流に限らず、日本国内での日々の授業においても同様だが、10 回のオンラインミーティングでできる関係性は 1 回の対面での交流で深まる絆と同等かそれ以下であろうと常々感じている。もちろん、各人のスタンスや交流の内容によってオンラインでの絆を深める方法は如何様にもあるとは思うが、身体的な邂逅を伴わない交流は実態を

感じにくく、果たして次に違う場面で偶然出会った時に相手を認識できるかどうか甚だ怪しいところである。

一通りオンラインでの交流のメリット、デメリットを述べたが、COVID-19 の感染拡大下という特殊な状況においてメキシコとの交流が実現したことは大きな快挙と言えよう。願わくは、状況が改善し実際に現地に行って交流する機会が得られることを望む。

やや冗長になってきたため、研修を通しての学びを述べて結びとする。日系企業の方や現地で働いている日本人の方からのお話を通して、好きなことを追求することの大切さを改めて認識した。また、至極当たり前であるが、世界中どこへ行っても人は人であるということも感じた。その一方で、文化や慣習の違いによる軋轢が生じるケースもあり、違いを認識すること、その違いを否定するのではなく一歩引いて眺めてみること、そして自分なりの付き合い方を見つけることが大切なのだと気づいた。

先住民の方や有機農家の方など、現地の方との交流では、まず現地の方の積極性や熱意に感動した。画面越しにではあるが、私たちに現地の生活の様子が伝わるように丁寧に説明してくださり、質問にも一つ一つご回答くださった姿勢に感謝の意を表したい。そして、ラ・カソナに暮らす先住民の方たちのホームページを翻訳した際には、メキシコ国内にも複数の民族が暮らしており、その間に衝突や融和の歴史があり、それらの積み重ねで今の社会があるということを改めて感じた。

異なる文化の中で生きる人々との交流は、自国の文化の相対化を可能にするだけでなく、何が自分にとっての幸せなのか、という問いも突き付けてくる。他者との交流を通して、ある国や地域のある家庭環境に生まれ落ちたことで培われた特定の価値観を自分が持っているということ、そして世界には自分とは異なる環境で生まれ育った自分とは異なる価値観を持つ人が無数に存在することに気づくのだ。違うと気づき、違いの生じる背景に思いをはせる。価値観、すなわち何を大切に感じるかということを見つめ直すと、自分が幸せに生きるために大事にしたいことは何かが見えてくる。自身を見つめ直すために他者と出会い、互いに互いの考えの道筋に影響を与え合う。それが他者との交わりであり「交流」ということなのだと改めて感じた。

最後に、数々の交流を企画してくださり、現地との連絡を一手に担ってくださった受田先生、研修をリードしてくださった近藤さん、そして一緒に研修に参加した皆さんに感謝の気持ちをお伝えして拙筆を置きたいと思う。ありがとうございました。

研修を終えて 10　「ビデオ作成を通した交流」

鶴山和人（農学部生命科学課程 工学専修 3 年）

2020 年を思い返すと、なんといってもコロナウイルス、その拡大による緊急事態宣言が思い出されるだろう。思うように外出できず、大学での活動も大きく制限されてしまった。海外研修などはもっての他であった。2020 年度のメキシコ国際研修もその一つだ。僕はスペイン語選択で、1 年でスペイン語の必修が終わった後もスペイン語を学び続けていたのだが、海外でスペイン語を話す機会が得られるメキシコ国際研修は魅力的ですぐに参加することを決めた。国際研修の内容自体もとても魅力的で、メキシコシティに 1 週間、ユカタン半島に 1 週間と生活して、向こうの先住民族との交流などは、普通のプログラムでは体験できないものだったと思う。しかし、その魅力的なプログラムは出発の 1 日前に中止が告げられた。非常に残念だった。2 週間という期間をメキシコで過ごせることを参加メンバー全員が楽しみにしていたはずだ。班を作り、それぞれの班で進めていた向こうで行う発表の準備も無駄になってしまった。僕は料理班に所属していてユカタン半島の農家に自分たちで考えた日本料理を振舞う予定だった。そういった準備をしていただけに、余計に行けなかったことが悔しかった。

3 年生になって、A セメで今年のメキシコ研修が行われると知り、すぐに参加を決めた。おそらく現地に行くことはできずオンラインになるだろうとは思っていたが、ここで参加しないと未練が残る気がしたため参加することを決めた。オンラインだったためか、実際の活動自体は少ないように感じた。しかし、現地で働いている若手日本人との交流、先住移民コミュニティの方々との交流、UNAM との交流、農家との交流と様々な研修ができたと感じている。

僕は、川瀬さんと農家の方に向けて、日本の有機農家を紹介する動画を作成した。これを選んだのは、上記の通り去年のメキシコ研修で農家の方に日本料理を振る舞う予定だったため、農家との交流を担当することで去年一緒に準備していた班の思いを昇華させたいと思ったからだ。正直、動画の作成は作成期間が短かったこともあり、去年の準備よりも大変だった。それもあったからか農家の方から反応をもらえたことが嬉しく達成感を感じることができた。そして受田先生からスペイン語の文章がよくできていたと言われたことが何よりも嬉しかった。主体的には関わっていないが、他の企画も楽しく、改めて今度こそ実際にメキシコに行きたいと思わせてくれた。

最後になりますが、ここで忙しい中 2021 年度のメキシコ研修に携わってくれた方々に感謝の気持ちを述べたいです。そして今回の研修を担当してくれた受田先生は、1S セメスターの頃のスペイン語の先生で、2 年の国際研修、そして今回と長らくお世話になってきました。ありがとうございました。

オンライン研修の利点と課題：メキシコ側の意見

六車梨夏（教養学部文科 I 類 1 年）

今回のメキシコ国際研修は、新型コロナウイルスによるパンデミックの影響で、初の全面オンラインでの実施となった。本研修に協力してくださったメキシコの方々に、オンラインで実施したことの利点や改善すべき点、その他の意見を交流後に募ってみたので、以下その結果を簡潔にまとめてみたい。

まず、多くの交流先は、コロナ禍にもかかわらず、オンラインのツールを駆使して遠く離れた国同士をつなぎ、時差や物理的な距離をこえて交流を実現できた点を評価している。また、質疑応答などを通して東京大学の学生側が興味・関心を示し、有意義な交流ができた点もほとんどの交流先が指摘している。例えば、メキシコで活躍する若手日本人との交流では、ZOOM のブレイクアウトルーム機能を利用して少人数の部屋にわかれ、数回に渡って適切な時間配分で質疑応答の時間が設けられたことが良かった点として挙げられる。ただし、部屋のメンバーが重複してしまうことや、学生側の質問が不十分であったことが改善点に含まれる。

オンライン上で活発にやりとりができたことについては、EDNICA や UNAM、トラスカラ州の農家の方々も言及している。一方で、オンラインならではの問題点として、時間配分に改善の余地があるという意見も少なくなかった。例えば、トラスカラ州の農家の方々は、通信の不具合や ZOOM の使用に慣れていなかったことから、予定していた内容の全てを紹介することはできなかったと述べている。他にも、UNAM の学生との交流では、東京大学側に与えられた発表の時間が長く、時間配分が不公平であったことが問題点としてあげられる。また、オンライン上では一度に最大で１、２人のみが会話に参加できるため、今後はファシリテーターを設けるなどして、より円滑なコミュニケーションを可能にする手段が求められる。

オンラインでの国際研修の実施が初の試みであったこともあり、多くの課題が存在するが、海外への渡航が困難である中、有意義な交流が実現できたことはオンラインの最大の利点であり、今後に活かすことでコロナ禍においてより多くの国際交流が可能になるであろう。

先住民移住者 HP の翻訳例

Orgullo Otomí

NGU / CASA / HOME · 'BEFI / SERVICIOS / SERVICES · NUHE / NOSOTROS / WE · NTHE / CONTACTO / CONTACT

Versión en Japonés

Ante el COVID-19, ayúdanos comprando una muñeca Ar Lele ¡Solidarízate!

ラ・カソナの民芸品生産者たちのデジタル・カタログ

メキシコシティでは、多くの民芸品の作り手や売り手が、COVID-19によって危機的な状況に陥ってしまっています。通行人でいっぱいの通りで商品を売っていた、ソナ・ロサ地区のオトミーのコミュニティは、特に大変な状況になってしまっています。

しかし、オトミーは努力の末に、商品の売買や展示を再開することができました。

これは、ラ・カソナの作り手たちの商品のカタログです。それぞれ、生産者の氏名、連絡先、商品の名前、値段、大きさが記載されています。もし、お気に召した商品がございましたら、出品者の氏名、購入数、通し番号をご提示いただければ、出品者から直接ご購入いただけます。（詳しくは下の画像をご覧ください）

（サンプル）

私は××××と申します。私たちの民芸品のページへようこそ！

商品は出品者から直接ご購入いただけます。

1 出品者の氏名と連絡先をお控えください。

2 商品の名前、大きさ、値段など、商品の特徴を明記してください

3 ご購入の際は、郵便番号にご注意ください。

13人の作り手による、200種類以上の商品もございます。ぜひお買い求めいただき、私たちを支援してください。

© このカタログを不正に利用することは法律によって禁止されています。

（日本語訳：近藤晏誉・村瀬正紘）

編集後記

近藤晏誉（教養学部教養学科地域文化研究ラテンアメリカ研究３年）

今回のメキシコ研修は、例年のものと比べて大きく制限を受けたが、同時に物理的障壁を取り払った新しい試みができ、みのり多いものであったと感じる。画面越しであっても、メキシコの多様な側面の一端を知ることができた。そういえば、研修の仲間たちも、互いに画面の中の顔しか知らないな。ここはひとつ、顔を合わせて豪華なメキシコ料理を楽しめる、打ち上げの日を楽しみに待つとしよう。

オトミー移住者の作る人形

第三回メキシコ研修報告書

令和３年３月26日発行

編集　東京大学教養学部３年　近藤晏誉

印刷　（株）三栄コピー